



本稿は、当初、京機短信No.133(2010.04.20)～No.166(2011.09.05)で連載されたものであるが、読みやすさに配慮して、全編を通じた総集編として若干の改訂を加えた原稿を再録する。オリジナルとはレイアウトが異なるが、上記「京機短信 No.133」のヘッダーだけはオリジナルの雰囲気伝えるために、そのまま転載している。(2023年7月)

鉄都に生きた男たち

千々木 亨 (S54/1979卒)

目次

第一話 八幡製鐵所の礎を築いた男	2
1. 製鉄業の大先輩 景山齊氏	2
2. 景山氏と八幡製鐵所との出会い	3
3. 景山氏が入社した当時の八幡製鐵所	4
4. 日本初の鉄骨建造物への挑戦	4
5. 国会議事堂の建設	5
6. 日本の製鉄事業拡大を指揮した景山氏	6
7. 京大の技術者魂 「おのれの技術力で勝負せよ！」	6
(後記)	
第二話 製鉄業界就職第一号の京大生～技術者の美学を貫いた男～	8
1. 製鉄業界就職第一号の京大生 沼田尚徳氏(尚徳翁)	8
2. 尚徳翁の家系～水戸藩士沼田一門	9
3. 天狗党の乱	9
4. 天狗党と尚徳翁の伯父 沼田準次郎	10
5. 天狗党の乱に巻き込まれた久次郎と順三郎	11
6. 囚われの身になった順三郎	11
7. 明治新政府に翻弄された伯父 沼田準次郎	12
8. 教育者 沼田順三郎	12
9. 沼田尚徳翁の青春時代、一高時代	13
10. 尚徳翁 京都へ	14
11. 尚徳翁 官営八幡製鐵所へ任官	16
12. 尚徳翁の最初の挫折	16
13. 尚徳翁の渾身の大事業 河内貯水池建設	17
14. 尚徳翁のこだわり 死亡事故ゼロ	20
15. 悲しみを乗り越えて	21
16. 企業利益より社会貢献～尚徳翁の美学	22
17. 文学と尚徳翁	23
18. 引き継がれる美学と想い	23
(後記)	

鉄都に生きた男たち

第一話 八幡製鐵所の礎を築いた男

千々木 亨 (S54/1979卒)

1. 製鉄業の大先輩 景山齊氏

小雪の舞い散る2ヶ月ほど前のある晩、京機会の新しい名簿が自宅に届いた。そういえば昨年(2009年)11月の総会で「京機会名簿はお寺の過去帳のようなもの。これが我々がこの大学に在籍した証だから、これからも発行を続けます。」という報告があった。ぼんやり大学のことを思い出しながら、第1期生から順に名簿の名前を追ってみた。すると第9期生(1901年卒業生)の欄まで目をとおした時、ある歴史的人物の名前が目に飛び込んできた。

景山齊(ひとし)氏。日本の鉄骨建造物設計者の草分けであり、明治・大正・昭和の八幡製鐵所の礎を築いた人物の一人で、私の勤めた八幡製鐵所でご先祖様と崇められる人物である。にも関わらず景山氏の名は意外に近代製鉄の歴史書には取り上げられておらず、同氏のことを記憶されている人もずいぶん少なくなった。

しかも、昭和32年生まれの私が八幡製鐵所に入所した時にはすでに景山氏は亡くなられており、その姿もかつて製鐵所に飾られていた歴代製鐵所長の肖像写真で拝見したことがある程度である。

そんな景山氏を私が大変親しく感じるようになる出来事が起ったのは、この京機会名簿が届いてから2週間ほど経ったころである。実は景山氏は引退後「製鐵むかしがたり」という自叙伝を執筆されている。この本は昭和30年代に限られた関係者にのみ配布された非売品で極めて稀少な本である。小職もその本の存在についてうわさには聞いたことがあったが、どのようなものか想いもよらなかった。その本をなんと拙宅からほんの50mほどの所にある古本屋で発見したのである。散歩の途中たまたま立ち寄り見つけた。かび臭い書架の片隅にひそかに取り残されているその本を眼にした時、言われえぬ大学の縁に心のときめきを禁じえず、拝むようにして購入させて頂いた。この自叙伝は口述筆記で書かれているので、読み進むにつれ、今まで会ったこともないにも関わらず景山氏が現れて耳元でささやいているような錯覚にとらわれる。その語り口から景山氏の実直な人柄が感じられ、なにやら同氏のことを無性に身近に感じられる。

そんな出来事から俄然興味が沸いてきたので景山氏について少し調査してみることにした。ほどなくして、かつて八幡製鐵所で懇意にしていた開田一博氏が、退職後日本の鉄骨構造建築の導入と発展過程について博士論文にまとられていることを突き止めた。開田氏



八幡製鐵所長時代の景山齊氏
(出典：八幡製鐵所八十年史)

は現在北九州イノベーションギャラリー（産業技術継承センター）の研究員として活動されておられる。さっそく同氏を訪ね景山氏の業績について情報を頂いた。これも京機会名簿という過去帳が導いてくれた不思議なご縁である。

以上のようなことから機会を頂いたので、景山氏の残された「製鐵むかしがたり」と関連資料の内容を抜粋して京機会の方々へご紹介したい。なお簡略化のため、敬称、敬語は省略させていただいた。

2. 景山氏と八幡製鐵所との出会い

景山氏は明治12年（1879年）2月13日生まれで旧制松江中学の卒業生である。中学時代は野球部の捕手として活躍した。戦後日本商工会議所会頭となった足立正氏は野球部の同窓である。またボート部にも所属し整調を担当して宍道湖や中の海などを漕ぎまわったそうである。文学や漢文にも精通され、大学時代には尺八を、又、八幡製鐵所時代には日本画もたしなまれた趣味人でもあったそうだ。その後、旧制第四高等学校から京都帝国大学機械工学科に進学する。京都帝国大学では特に朝永正三（せいぞう）教授（朝永振一郎氏の伯父）の指導を受けた。卒業後関西鉄道へ就職した時も、又八幡製鐵所に転職した時も朝永教授の薦めに従ったと記述されている。

明治38年に卒業する予定であったが、卒業直前に発電所の起工式を見に行った帰りに肺炎になり、明治39年5月の卒業となった。機械工学科の同期卒業生は18名。同期生には九州帝国大学、東京帝国大学で教鞭をとられ文化功労賞を受賞し、終戦当時には日本機械学会会長も歴任された小野鑑正氏がいる。小野鑑正氏の妹君が後に景山氏の奥様となる。小野鑑正氏の父で景山氏の義父 小野正作氏は明治草創期の機械工業界の基礎を築いた機械技術者である。江戸の御徒町の御家人の子として生まれた小野正作氏は海軍の横須賀製鐵所へ図面見習いとして入所するや習得したフランス語を駆使し、通訳として活躍する一方で、技術系経営者としても頭角を現し、海軍兵工廠、田中製造所（東芝の前身）、大阪鉄工所（日立造船の前身）等々 後に日本近代産業振興の担い手となったさまざまな基幹工場の経営安定化と発展に辣腕を振るった。景山氏が結婚した時には官営八幡製鐵所の工作課長で製鐵所建設に従事していた。景山氏にとって小野氏の縁が八幡製鐵所との縁となる。卒業が遅れた景山氏は朝永教授のはからいで卒業後関西鉄道に入社し新車両の設計に1年ほど従事したが、義父の小野正作氏からの勧誘に加え朝永教授や当時小野鑑正氏が教鞭をとっていた大阪高工の安永校長の薦めもあり、明治40年4月に官営八幡製鐵所に就職した。

当初官営八幡製鐵所はドイツ人技師を雇用し技術導入しながら建設を進めたが、結局さしたる成果も挙げられず一時は高炉・転炉が休止するという存亡の危機にまで追い込まれた。当初20名いたドイツ技師や職工長は明治37年までにほとんど解雇された。そんな中、操業トラブルを次々に解決していったのは日本の技術者たちであった。日露戦争後増大する国内鉄鋼需要をまかなうため、明治39年には4ケ年で八幡製鐵所の能力を3倍にする第一次拡張計画が実行に移され、製鐵所は他の企業で実績があり即戦力となる技術者を帝国大学卒を中心に必死にかき集めていた。景山氏が入社したのはそのころである。

3. 景山氏が入社した当時の八幡製鐵所

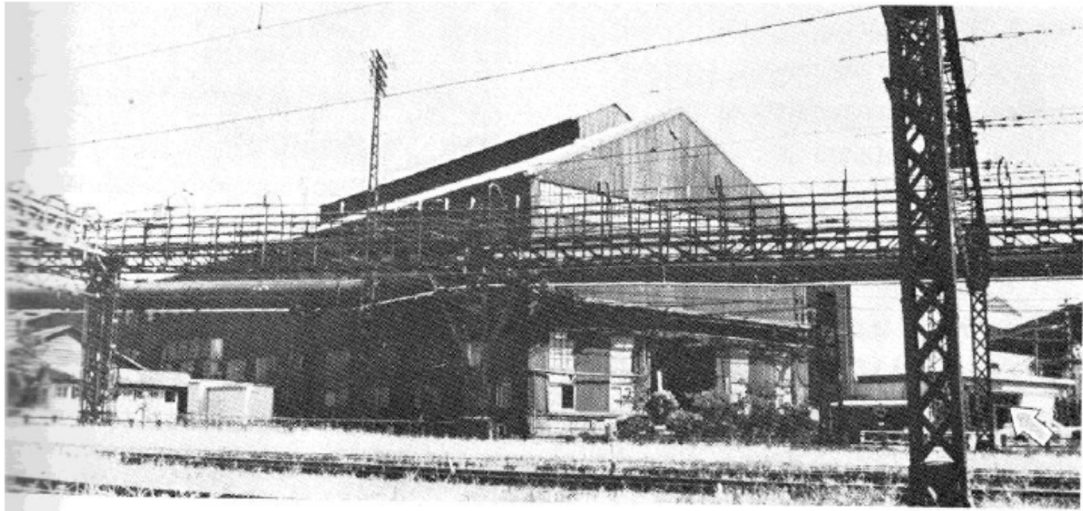
当時の製鐵所は洞海湾沿岸を整地してにわか作りで建てた工場であった。その職場環境も劣悪であったようだ。スタッフの勤務は毎日朝6時から晩6時までの12時間勤務。学卒である景山氏も官舎のあった大蔵地区から3 kmほどの劣悪な泥道を毎日歩いて通ったそうである。製鐵所構内にもまだまともな道路はなく、技師も職工も線路の上をてくてく歩いて通勤していた。事務所には食堂なるものもなく製鐵所幹部を含め皆手弁当であった。製鐵所幹部は当時すでに石炭で繁栄していた若松地区に居を構え、優雅にも洞海湾を船で渡って通勤していた。泥道を歩く必要はなかったようである。当時の本事務所のすぐ前には幹部専用の渡場があったそうだ。おそらく、先般（2009年10月31日）京機会九州支部で懇親会を行った料亭金鍋などは若松地区で製鐵所幹部が息抜きをする格好の宴の場であったであろう。

4. 日本初の鉄骨建造物への挑戦

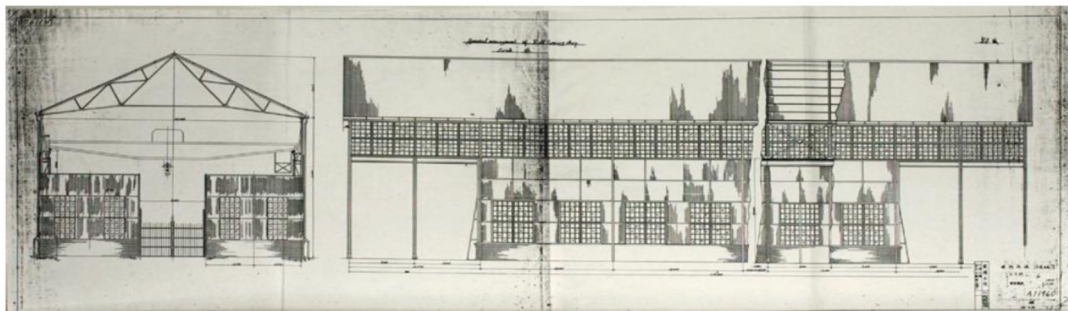
景山氏は入社当時から日本の鉄骨建造物がすべて外国の鉄製で外国人の設計によるものであることに憤慨し、なんとか日本の鉄と技術で鉄骨建造物を建設したいと考えていた。そのため、機械工学科出身の景山氏は土木設計技術を自前で猛勉強したそうである。景山氏の口述によると大学時代にも基礎の学問を学ぶ機会があったようである。当時の京都帝国大学には機械工学科と土木工学科しかない時代である。機械工学科の学生は一部土木工学科の講座も受講出来たそうで、景山氏も在学中 建築構造学を受講し材料強弱学を担当していた松村鶴造先生などに教えを受けた。以下開田一博氏が当時の京都帝国大学のカリキュラムを調査されているのでここに紹介する。当時の京都帝国大学には機械工学科と土木工学科との共通講座として図式力学があり、おそらく景山氏はこの講座も受講していたと思われる。景山氏は強度計算書や応力ダイヤグラムを手もとに持っていたと述べており、トラスの図式解析などの技術を習得出来たようである。その他、京大機械には当時 松室重光講師による工場設計法などの講義もカリキュラムにあり建築構造技術の講義も充実していたようである。一方、土木工学科には日比忠彦教授がいた。彼は、明治35年（1902）にドイツ、フランスへの2年間の留学後、明治38年（1905）から長期にわたり、建築雑誌に鉄骨構造の本格的な設計手法についての論文を掲載している。景山氏の口述によると、出張して京都大学に立ち寄っては教授の教えを請うたとある。開田氏はこれらの京都大学からの学術的知見が景山氏にとり大いに参考になったと見ている。

かくして、景山氏はすべて八幡製鐵所の鉄を用いた純国産の鉄骨建造物を日本ではじめて設計し建設までこぎつけた。その第一号の建造物が幅20m長さ100mの八幡製鐵所のロール旋削工場である。

米英調の屋根とトラスにドイツ式柱を取り込み連続梁を用いたユニークなクレーンゲーターを採用するなど独自性を意識した設計である。景山氏入社後わずか3年のことである。この建造物は現在のJR九州のスペースワールド駅の傍に相当する場所にあったが、15年前（1995年）の八幡東区東田地区再開発の折、取り壊された。



景山氏が設計した八幡製鐵所ロール旋削工場（昭和51年当時）
（出典：八幡製鐵所土木誌より）



景山氏が設計した八幡製鐵所ロール旋削工場全体図面
（出典：開田一博「日本における鉄骨構造建築の導入と発展過程に関する研究」より）

景山氏の快挙は、鉄骨建造物設計の国産技術のレベルの高さを証明するものとなり、日本中に鉄骨建造物の建設ラッシュを巻き起こした。開田氏はその背景には日本での鋼材の国産化の進行があったと指摘する。確かに右表に示すように日露戦争後、鋼材使用量の伸びと鋼材の国産化は急速に進行している。

	鋼材使用量 千トン/年	輸入依存率 %
明治34年(1901)	194	97
明治35年(1902)	218	86
明治36年(1903)	267	85
明治37年(1904)	310	80
明治38年(1905)	445	84
明治39年(1906)	404	83
明治40年(1907)	545	80
明治41年(1908)	531	81
明治42年(1909)	379	73

日本国内鋼材使用量と輸入依存率
（出典：八幡製鐵所八十年史より）

5. 国会議事堂の建設

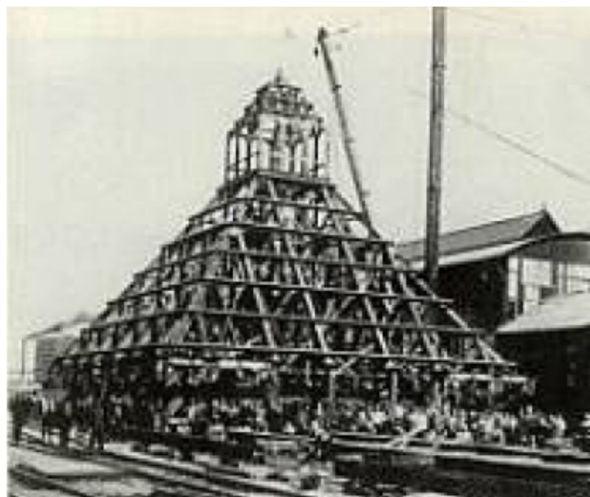
景山氏はその後次々と国内の鉄骨建造物の建設を任されることとなる。築地の海軍工廠製鋼工場上家や小石川陸軍工廠銃砲工場上家なども景山氏の設計であった。さらには当時の白仁（しらに）武 八幡製鐵所長官が中央政府に日本国のシンボルである帝国議会の鉄材と設計は八幡製鐵所にまかすべしと大々的に宣伝して受注に成功し、当時工作課長であった景山氏は大正十年にその国会議事堂建設の鉄骨構造の設計施工の責任者に任ぜられた。

景山氏は9800トンという膨大な鉄骨を用いたこの大事業を昭和2年までの6年間で完遂している。その仕事は慎重綿密で、議事堂の鉄骨トラスを八幡構内で一旦仮組みし強度確認する念の入れようであった。

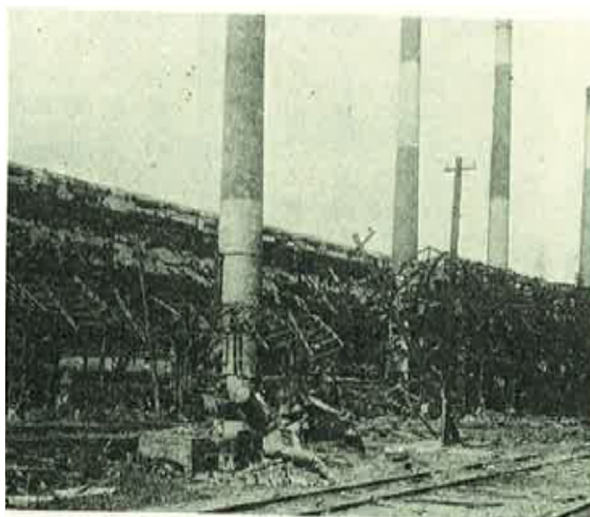
6. 日本の製鉄事業拡大を指揮した景山氏

その後も景山氏はアイディアマンの工務部長として高炉、ロール鋳造機、圧延機的设计に手腕を振るった。又、技能工養成学校など、各種の福利厚生や教育機関の建設も手がけた。又、鋼材部長となった後は洞岡地区や戸畑地区の拡張、ストリップ工場（薄板連続圧延工場）の建設など、八幡製鐵所の度重なる大拡張事業を次々に成功させ、当時世界有数の一貫製鐵所へ育て上げていった。

昭和9年に日本製鐵株式会社が設立されると景山氏は技師長に就任した。更に常務として臨時建設局長を勤め昭和10年代の日中戦争前夜の鉄鋼大增産要請に対応すべく、当時のお金で6億8千万円という巨額投資となった輪西、広畑、北朝鮮の清津の大拡張事業を推進した。その後景山氏は八幡製鐵所に戻り、昭和16年から昭和20年の太平洋戦争の最中の戦時の八幡製鐵所長を務めた。八幡で製鐵事業を統率し幾多の空襲にも耐えながら鉄の供給基地の最前線を終戦直前まで守り抜いた。



八幡製鐵所構内で仮組みされた国会議事堂中央塔の鉄骨(出典：八幡製鐵所写真集より)



空襲で甚大な被害を受けた八幡製鐵所(出典：八幡製鐵所八十年史より)

7. 京大の技術者魂 「おのれの技術力で勝負せよ！」

八幡製鐵所にはその他にも偉大な足跡を残された先輩がたくさんおられた。小職もそんな諸先輩から世界をリードする新技術、新事業に常に挑み続ける技術者魂を入社以来何度も教えられてきた。「群れるな。一年目は黙って働け。二年目からは上司に反旗を翻してでもおのれの技術力で勝負せよ。」というのが、八幡製鐵所に勤めた京機会の敬愛するある先輩から受けた薫陶である。その源流に景山氏のようなすばらしい大先輩がいることを今回改めて学ぶことが出来た。

小職は今、北九州エコタウン事業という新日本製鐵が北九州市と共に展開している環境事業に参画している。その建設地はかつて官営八幡製鐵所時代に浅瀬の洞海湾を浚渫（しゅんせつ）した土砂で造った若松地区の埋立地にある。まさに、景山氏はじめ諸先輩の遺

産のほんの片隅を間借りして事業をやらせてもらっているようなものである。この埋立地の道は雨が降ればすぐに泥まみれになる。そんな開拓小屋のような職場に通いながら、かつて高き志に心を燃やし、毎朝5時前に起きては真っ暗な中、泥だらけの悪路を製鐵所まで歩いて通い続けた若き日の景山齊氏に想いを馳せる今日この頃である。

(後記)

寄稿に当たっては、収集した情報に基づいた誠実な記述を心がけましたが、中には小職が誤認した部分もあろうかと存じます。お気づきの点,ご感想等ございましたら下記までお寄せ下さい。皆様の忌憚のないご意見をお待ちしております。

千々木 亨 mail : toruchichiki@gmail.com

(出典、参考文献)

- 1) 景山齊「製鐵むかしがたり」(1964年)
- 2) 八幡製鐵所八十年史
- 3) 八幡製鐵所土木誌
- 4) 開田一博 九州大学学位論文(2009年)
「日本における鉄骨構造建築の導入と発展過程に関する研究：
官営八幡製鐵所の創設期から昭和初期における工場建築の設計と建設」
- 5) 八幡製鐵所写真集
- 6) 鈴木淳(法政大学イノベーション・マネジメント研究センター)編
フランス語学習者から機械技術者へー小野正作の明治ー
(法政大学創立者 薩埵(さった)正邦 生誕150周年記念連続講演会資料)

第二話 製鉄業界就職第一号の京大生 ～技術者の美学を貫いた男～

千々木 亨 (S54/1979卒)

1. 製鉄業界就職第一号の京大生 沼田尚徳氏 (尚徳翁)

近代製鉄が日本に誕生して160年以上が経過した。その間京都大学から巣立った数多くの先輩が製鉄分野に奉職され発展に大きく寄与されてきた。その先鞭をつけた製鉄業界就職第一号の京大生が沼田尚徳氏である。

製鉄分野に携わったすべての京大生にとり大先輩であり、元祖とも言える存在である。

以下本文では沼田家の他の方と識別し、かつ敬愛の情を込めて敢えて沼田尚徳氏のことを「尚徳翁」と称することとする。なお、他の方の敬称は省略させて頂いた。

尚徳翁は1900年7月京都帝国大学を第一期生として卒業し、当時まだ建設中であった官営八幡製鉄所に技手として任官した。以来、30年余にわたり土木総監督として辣腕を振るい、製鉄所のみならず北九州工業地帯の基盤となる土木事業を次々に成功に導いた。中でも工業用水と水道用水供給の為に北九州郊外に建設した河内ダムは当時東洋最大級の規模を誇り、日本を代表する近代化産業遺産



沼田尚徳氏
(沼田家 提供)

のひとつとして世に知られている。ダムには当時の最新の土木技術がふんだんに用いられた。その一方で尚徳翁は現場の石材と自社鋼材を用いた独自の設計で土木建造物への鋼の新利用技術に果敢に挑戦すると共に、環境にも優しい工法も積極的に採用した。更に尚徳翁は、ダムと貯水池に市民公園としての機能を付与させることにも腐心し、生活道路の橋梁から取水塔、管理事務所に至るまで欧米風の洒脱なデザインを凝らした。安全管理でも細心の配慮がなされ、当時西日本最大級の難工事であったにも関わらず8年の建設期間中1名の死者も出さなかった。90年を経た今も河内ダムと貯水池は、給水という本来の機能を果たしつつ憩いの場として市民に広く親しまれている。

ところが尚徳翁は数々の大事業を手掛けた功績のある人物であるにも関わらず、昭和5年に54歳で八幡製鉄所土木部長を依願退職し製鉄の第一線から退かれた。製鉄所の利益よりも社会の公益を優先する一途な想いを持った方で、その後も北九州地区の水道整備や小倉陸軍造兵廠の土木業務の指導に当たられたが、日中戦争が本格化する昭和9年、一切の事業から身を引き田舎に隠棲されてしまわれた。どこか謎めいた先輩である。温厚で実直、愛

妻家で情熱の人、だが仕事では妥協しない、漢詩人、達筆にして教養人、そんな尚徳翁の魅力を伝える昔話を、飲み屋の片隅で聞いたような気がするが、それももう20年以上も前のことである。今ではその語り部もいなくなった。自叙伝も銅像も残っていない。残っているのは、市民にやすらぎを与え鉄都の誇りを伝えてくれる壮麗な建造物群だけである。

そこで、小職は一昨年（2009年）京機短信への投稿を依頼されたことを機にこの大先輩の素顔に迫るべく調査を開始した。資料集めは容易ではなかったが、八幡製鉄所総務部の菅和彦氏にご相談したところ、八幡製鉄所の土木関係者の会である「つちき会」の報告書はじめ菅氏が収集された資料を快くご提供頂くことが出来た。又、八幡製鉄所の土木技術部門OBの大木克孝氏には土木技術史のみならず幅広い視点から貴重なアドバイスを数多く頂いた。水戸出身の尚徳翁と沼田一門の方々の調査については、同じ水戸出身である京機会の鯨岡絵里嬢（2008年卒）にご協力頂いた。DL新八のホームページを運営されておられた長倉こつね氏には同氏が保有される天狗党はじめ水戸関連情報の引用をご快諾頂いた。そこで、ご提供頂いた情報を元に小職なりに尚徳翁の足跡を追ってみたので紹介する。

（ご協力頂いた皆様には心よりお礼申し上げます。）

2. 尚徳翁の家系～水戸藩士沼田一門

沼田家は水戸藩に代々仕えた武家の家系である。水戸藩が発行した藩士家系譜をまとめた「水府系纂」には尚徳翁の祖父、曾祖父の名も掲載されている。

尚徳翁の祖父は沼田久次郎。水戸藩内で歩行目付・普請奉行を経て1863年54歳の時奥祐筆頭取に進んだ。奥祐筆頭取とは藩幹部の筆頭秘書官のような役職で、特に藩の機密文書を取り扱い執政などに伝える重要な役職であった。藩内で久次郎はその才覚と人物が高く評価されていたことがうかがわれる。

尚徳翁の伯父は沼田準次郎。20歳の時、一橋慶喜公に藩主徳川慶篤が共に上京するよう命ぜられた時、急逝した兄に代わって御床机廻役（藩主の寝床や机周りの世話役）として随行している。準次郎はそのまま京都滞在中に徒歩目付に昇格しており、この時藩主の信任を得たことが推察される。

尚徳翁の父上は沼田順三郎。若きころは水戸藩士として父久次郎と共に行動していた。順三郎は幕末を闘い抜いた後、明治時代には教育者として活躍した。晩年は官営八幡製鉄所の高見官舎で尚徳翁と長く同居されており、尚徳翁の人生美学や思想形成に大いに影響を及ぼしたと目される人物である。

これら沼田家三人はいずれも水戸藩士としての誇りと気概に満ちた人物であったが、三人は幕末に水戸藩から全国に展開した大事件「天狗党の乱」に巻き込まれ、壮絶な人生を歩むことになる。

尚徳翁の人生と業績を語る前に、尚徳翁の育った環境とその精神的土壌を知る上でこの三人の歩みにまず触れねばならない。

3. 天狗党の乱

水戸藩では大日本史編纂を契機に、皇室を尊び敬天愛人を重んずる思想が醸成され、日

本武士の精神的支柱ともいえる哲学体系にまで発展した。水戸学と呼ばれる。水戸学は全国に普及し水戸藩士のみならず幕末の全国の志士に大きな影響を及ぼした。

だが、やがて勤皇思想を崇拝する一方で徳川御三家として幕府を支えねばならぬ水戸藩士の中に大きな思想的ジレンマを生まれる。とりわけ、黒船到来後孝明天皇が日米修好通商条約を締結した幕府を糾弾する密勅を水戸藩に下命すると、その密勅を幕府に明かすかどうかの対応をめぐり、幕府支持を主張する佐幕派と天皇を支持する尊王攘夷派は激しく対立した。尊王攘夷派の一部は脱藩し桜田門外の変を引き起こすことになる。中には西丸帯刀らのように長州藩の桂小五郎らと倒幕行動で連携する趣旨の盟約を結ぶものも現れた。そのような中、尊王思想の指導者藤田東湖の息子である藤田小四郎らが水戸藩筑波山麓で決起したのが天狗党である。

その天狗党の急進派は1863年尊王攘夷を幕府に迫るべく反乱を起こした。



明治維新を4年後に控えた元治元(1864)年3月27日、茨城県の筑波山で水戸「天狗党」62名が兵を挙げました。旗は「尊王攘夷」です。 <http://nezu621.blog7.fc2.com/blog-entry-833.htm>

4. 天狗党と尚徳翁の伯父 沼田準次郎

尚徳翁の伯父である沼田準次郎は尊王攘夷派であり天狗党結成の発起人のひとりであったが、水戸藩内の佐幕派と武力で対決することには反対であった。準次郎は天狗党急進派を説得しようとしたが失敗し、藩の内紛に関わることを避け脱藩の道を選んだ。準次郎は江戸の千葉道場で千葉重太郎（坂本竜馬の剣術の師）に剣術を学んだ後、西丸帯刀などの倒幕派浪士と行動を共にしている。島崎藤村の「夜明け前」の第9章に描かれた2人の水戸の天狗連の話は、沼田準次郎と西丸帯刀が水戸藩の屋敷に囚われた後、騒乱のどさくさにまぎれて脱出した話を引用したものであると言われている。

ちなみに、西丸帯刀は水戸藩の名門野口家の次男であり、詩人の野口雨情の大叔父に当たる。後述するが、維新の志で結ばれた幕末の沼田準次郎と西丸帯刀とそれぞれ血縁のある尚徳翁と野口雨情が、半世紀後、北九州八幡の地で再び縁を持つことになる。

5. 天狗党の乱に巻き込まれた久次郎と順三郎

蜂起した天狗党急進派は闘いの長期化に伴い軍資金の調達に困窮し、次第に暴徒化してゆく。事態の深刻化を懸念した幕府はついに天狗党討伐を諸藩に命じた。水戸藩内では佐幕派の市川三左衛門は諸生党を結成し諸藩連合軍と共に天狗党を攻撃した。が、天狗党の士気は高く戦いを有利に進めた為、市川らは水戸へ逃げ帰り天狗党に加わっている者の一族の屋敷に放火し家人を投獄・銃殺するなど報復を行った。このことが、かつて共に同じ藩主に仕え同胞であったはずの天狗党と諸生党との志士たちの相互憎悪を決定的なものとした。

京都にいた水戸藩主徳川慶篤は、名代として宍戸藩主松平氏を内乱鎮静のため水戸へ下向させた。尚徳翁の祖父である久次郎はこの松平軍に加わり元治元年8月4日に江戸を出発した。尚徳翁の父君である順三郎もこの一行に加わった。通称「大発勢」と呼ばれる討伐隊である。

大発勢は8月10日に水戸城下に至ったが、その中に尊攘派多数がいるのを見た諸生党の市川らは一行の入城を拒絶した。大発勢は入城させるよう市川らと交渉するが拒絶され仕方なく水戸に近い那珂湊を占拠した。その時天狗党の一隊が駆けつけ大発勢に加勢したことから、大発勢は天狗党と同一視され、その後到着した幕府軍の討伐の対象にされてしまう。大発勢は当初、暴徒とされていた天狗党と行動を共にする事に抵抗があったが、この頃には天狗党に対する賛同論が広がっており、結局天狗党と共に幕府軍・諸生党と交戦状態に陥った。が、戦況ままならず、ついに大発勢は降伏した。元治元年10月5日、「幕府に真意を訴える機会を与える」という口実で誘き出された大発勢の総領松平氏が水戸城下で切腹させられると、大発勢千人余りは投降し、幕府により、その多くが死罪に処せられた。

久次郎は古河に囚われた後、翌年処刑された。享年55歳。武士として切腹することも許されなかった。天狗党の乱の資料の中に久次郎の辞世の句が残されている。

「一筋に 張りし心は梓弓 なに弛ふへき 苔の下まで」

天皇と藩主への忠誠を尽くす心の緊張感を最後まで失わなかった水戸藩士の気骨を感じさせる句である。

6. 囚われの身になった順三郎

久次郎の息子の順三郎は処刑は免れたが、銚子の寺で一時身を置いた後、富津の佐貫藩で幽閉された。順三郎の天狗党の乱以降の足跡についての資料はほとんどない。だが、戊辰戦争以降官軍が幕府軍を掃討してゆく過程で佐貫藩の天狗党の輩が解放されていることから、順三郎もそのころ自由の身となり水戸の自宅に戻ったと思われる。富津から水戸へ戻る道すがら順三郎が眺めた富津や君津の海岸は、当時貧しい漁村であった。無念の死を遂げた父君に沼田家の再興を誓いながら順三郎が家路をたどったその海岸に、一世紀の時を経て順三郎の息子が礎を築いた製鉄という近代産業が壮大なスケールで展開されることになる。

もちろん、当時の順三郎にはそのようなことは想像さえ出来なかったであろう。

7. 明治新政府に翻弄された伯父 沼田準次郎

一方で脱藩した準次郎は西丸帯刀とも別れ、全国を行脚しながら倒幕活動に傾倒していった。準次郎は中山道、高山、京都、九州と活動範囲を広げ、各地の勤王党志士をとおして岩倉具視や三条実美等の知遇を得て、維新後の中央政府に登用されてゆく。

準次郎が梅村速水と改名し高山県初代知事に就任したのは若干27歳の時であった。梅村は高山で、人別米・山方米の廃止、商法局の設置など数々の改革を進めたが、急進的な政策が地元住民に理解されず事態は知事を糾弾する大騒乱にまで発展した。「梅村騒動」と呼ばれるこの騒乱については江馬修氏の歴史小説「山の民」に詳しく描かれている。梅村は騒乱の責任は知事にあるとする明治政府により囚われの身になり、裁判が終わらぬまま半年後、東京刑務所内で謎の死を遂げた。明治2年12月、享年29歳であった。一説に暗殺説もあるが、真偽の程は今も不明である。

歴史小説「山の民」には、梅村の死の翌日刑部省が長兄を役所に呼んで遺品と遺骸を引き渡したとある。が、梅村にはこの時点で既に兄はおらず、引き取りに行ったのはその時すでに家督を継いでいた順三郎であったと考えられる。

勤皇思想で幕末の志士をリードしてきた水戸藩は天狗党の乱で優秀な人材のほとんどを失った。そのため、維新に大きく貢献した藩であるにも関わらず明治政府の高官にはだれも登用されていない。そのような中であって、若くして高山県知事に出世した梅村速水(沼田準次郎)は水戸藩烈士の遺族にとりせめてもの希望であり誇りであったであろう。いわんや、弟順三郎は、父親の無念を晴らし沼田家の名を高めてほしいと兄の活躍を大いに期待したに違いない。その兄が就任2年もせぬうちに、しかも罪人の汚名を着せられたまま冷たい遺骸となって戻ってきたのである。その時の順三郎の落胆と憤慨はいかばかりであったであろうか。

8. 教育者 沼田順三郎

順三郎は明治維新後教育者の道に進んだ。当初は水戸で活動されておられたようだが、尚徳翁が八幡製鉄所に入社する1900年ごろには水戸藩の江戸屋敷のあった東京小梅村に住まわれていた。沼田順匡という名で、八王子学校長などを歴任される一方で、「日本地誌略問答」、「高等読本字引」などの児童向け教本を執筆した。これらは日本近代教育の草創期の貴重な資料として国会図書館に保存されており、電子資料としてインターネット上で広く閲覧されている。



梅村速水氏像
本名・沼田準次郎 天保13年1月4日生
明治3年10月26日没(享年29歳)
明治元年・京都寺町二条下ル「倉巻舎」写真館で撮影

梅村速水氏(沼田準次郎氏)
(出典:DL新八 水戸天狗党の
足跡を追うHP)

9. 沼田尚徳翁の青春時代、一高時代

尚徳翁はそんな順三郎の長男として1875年（明治8年）11月27日水戸市上市町で生まれた。上市（うわいち）と呼ばれる地区は水戸藩士の武家屋敷が立ち並んでいた所で、当時この界隈に住んでいた学童の中には、後に日本の芸術や文芸の分野のリーダーとなってゆく画家の横山大観（当時は酒井秀麿）や作家の菊池幽芳等がいた。

尚徳翁は1894年（明治27年）旧制第一高等中学校に入学した。尚徳翁が入学した年、それまで予科2年本科3年の5年生であった高等中学校は予科が廃止され本科3年のみとなると同時に高等学校として再整備された。旧制第一高等中学校は尚徳翁が入学する直前、木下廣次校長の学校改革により自由な校風に満ち溢れた活気のある学園に成長していた。木下廣次氏は後に初代京都帝国大学総長となり、東京帝大と一線を画した自由な学問の場を探求してゆく。その木下ワールドとも言える自由な学風は一高、京大で青春時代を送った尚徳翁の思想形成に少なからず影響したのであろう。

尚徳翁の一高工科志望の同窓生（明治30年卒業）61名の中にその雰囲気伝える豪傑が多くいた。

特筆すべきは、日本近代野球の礎を築いたベースボール部のメンバーたちである。日本学生野球の祖となり野球の殿堂入りを果たした青井鉞男、後に尚徳翁と共に京都帝国大学に進み私鉄建設で辣腕を振り晩年は関西財界の発展に貢献した松島寛三郎、鉄道技師としてアジアを飛び回りながら野球の解説書の著作に励んだ津田素彦、上村行榮などがそうである。

今の東京六大学での東大野球部の低迷からはとうてい想像出来ないのだが、当時の一高ベースボール部は常勝軍団でありまさに黄金時代を迎えていた。司馬遼太郎著の「坂の上の雲」にあるように、旧制一高の前身である東京開成予科で「打球鬼ごっこ」として始まったベースボールは正岡子規をはじめ当時の一高生をとりこにした。他にこれといったチームがないので当たり前であるが、当時、一高ベースボール部にかなう相手は日本中見わたしても見当たらず、彼らは自ら日本最強と豪語していた。天狗になった彼らは腕試しをするため横浜に居留していた米国人のチームである横浜外人倶楽部に試合を申し込んだ。最初はまったく相手にもされなかったが、1896年5月23日、ついに、一高米国人教師の斡旋で、横浜居留地運動場（現在の横浜スタジアムあたり）で日本初の国際親善試合が実現することとなった。しかもそ



第一高等中学校校長
初代京都帝国大学総長
木下廣次氏

勝負表 (Table) 明治29年6月5日

第一高等学校 対 横浜外人

2日戦 (本場東京球場 明治29年7月18日発行) *ベースボール部による

Start	Position	I	II	III	IV	V	VI	VII	IX	X	Sum
SS	井原	o	x	o	s	x	o	x	o	x	3
3B	村田	x	x	o	o	o	x	o	x	o	3
1B	宮口	x	x	x	o	o	o	o	o	o	4
LF	富永	o	o	x	o	o	x	o	x	o	5
P	青井	o	o	x	o	x	x	o	x	o	3
C	藤野	x	x	x	x	o	o	o	o	o	2
2B	井上	o	x	o	o	x	o	x	o	x	4
RF	上村	o	x	o	o	o	o	o	o	o	5
CF	森脇	o	x	x	o	x	o	o	o	o	3
Total											33

Start	Position	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	Sum
3B	Fillis	x	x	o	x	s	x	o	x	o	1	
LF	Chipman	x	x	s	x	s	x	s	x	o	0	
CF	Abel	s	x	x	x	s	x	s	o	o	0	
C	Golden	x	x	x	o	x	o	o	o	o	2	
2B	Douglas	x	x	x	s	o	o	o	o	o	1	
P	Collen	x	o	x	s	o	o	o	o	o	1	
RF	Wittny	x	x	s	o	x	o	x	o	o	1	
SS	Tilden	s	o	x	o	x	o	o	o	o	2	
1B	Casary	x	x	s	x	s	o	o	o	o	0	
Total											0000310149	

行 s 三塁アウトなしはより Fielding に犯人とする際ベースにありたる走者を Standing とし、s を从て
 其時より、2アウトに犯人はありなり
 x Out の記号を本塁に 1 2 3 F 及び H と記すべしこれは 1B 2B 3B FI HBOut をり X X X X X
 o HB (Home base) に降りたる記号

明治29年6月5日第二戦の勝負表
(出典：第一高等学校公式ホームページ)

の試合で、なんと一高は29対4で快勝してしまったのである。尚徳翁が高校二年生の時である。当初は外国人チームが手抜きをした故のまぐれ勝ちかと思われたが、その2週間ほど後の6月9日には、米国東洋艦隊の強者を加え雪辱に燃えて挑戦してきたオール米国チームと再び対戦し、これまた32対9で圧勝した。ドロップを駆使した青井鉞男の戦略的投球術と頭脳的な攻撃で着実に加点した攻め口が功を奏したと思われる。米国人にとっては単なるお遊びであったかもしれないが、不平等条約で屈辱的な日々を送っていた日本人にとっては、一高ベースボール部の快挙は日本中の国民を元気づけ、これを契機に日本中の中学高校で野球（このころから野球と呼ばれ始めた）が一大ブームとなってゆくことになる。これらの若者たちの活躍が今の高校野球の歴史を切り開いたことは疑いのない事実である。投手で活躍した青井鉞男などはその後、横浜商業野球部監督として横浜高校野球の基礎を創り上げてゆく。今の東大生にはなかなか見られない型破りな男たちである。尚徳翁はそんな澁刺とした友と共にいた。当時の記録によると横浜外人倶楽部との試合には一高チームは応援団400名と共に大挙して押しかけた、とある。尚徳翁は尊王教育を叩き込まれた水戸藩士の息子である。きっとその集団の中で氣勢を上げていたに違いない。当時の裏話に、米国チームが一高チームへ送ってきた「テンキヨシ、ナンジニクルカ（天気よし、何時に来るか）」という電文を「テンキヨシ、ナンジニゲルカ（天清し、汝逃げるか）」と読み間違えて怒り心頭で横浜に向かったというエピソードがある。そんな笑い話の向こうに血気盛んな当時の尚徳翁たちの若き姿が見え隠れする。

尚徳翁の一高工科系同窓生には後に九州で活躍するメンバーも含まれている。九州帝国大学教授を長く勤め、最後は九大総長を勤めた荒井文六、長崎三菱造船所で活躍し造船業界の先駆的貢献を成すと共に地震研究所を立ち上げた末廣恭二がそうである。九州で社会人生活のほとんどを過ごした尚徳翁にとり、これらの青春時代の友は貴重な存在であったであろう。ちなみに出身地茨城に縁のある人物としては一級上に日立製作所の創業者の小平浪平がいる。

10. 尚徳翁 京都へ

活気に溢れた誇り高き一高生活を送った尚徳翁は仲間と共に東京帝国大学を目指し、見事合格した。が、運命の神様は彼の意向とは少々違った人生を準備した。

明治30年の一高卒業生は総計212名。そのうち工科志望者はわずか61名であった。その61名の中の東大合格者より14名がくじ引きで新たに開設される京都帝国大学に振り分けられることとなった。そして尚徳翁はそのわずかなる荣誉な当たりくじを引き当てたのである。京都に振り分けられた14名の内訳を出身地別に見ると、茨城県生まれの尚徳翁と栃木県出身の野崎泰一郎がもっとも京都から離れた県出身者であった。尚徳翁にとって、祖父や伯父が活躍した京都は決して遠い存在ではなかったであろうが、当人は当時かなり落胆したようである。

その14名の中にあの野球豪傑の松島寛三郎がいた。松島寛三郎は広島県の山奥の比婆郡の出身であった。広島県比婆郡はかつて



松島寛三郎氏
(出典：土木学会HP)

ヒバゴンという類人猿が棲むといわれたとんでもない田舎である。そんなところから松島氏は立志し13歳の時、単身旧制同志社中学に進学した。更に一高へと進学した松島氏は工科系クラスで尚徳翁と一緒に学ぶこととなる。松島氏は京都でも尚徳翁と同じ土木工学を専攻した。しかも京都帝国大学一期生の中で唯一の一高ベースボール部選手である。そんな英雄的存在でありしかも豪放磊落な松島氏のような男が京都でも同期の友となることは尚徳翁にとってもさぞかし心強かったに違いない。

松島氏のその後の活躍はめざましい。京大在学中、自らの出身校である同志社中学に野球部のコーチとして招聘され今の同志社大学野球部の基礎を作り上げた。大学卒業後は山陽電鉄（後に国鉄）に入社し鉄道建設に豪腕を振るい、更に新設された新京阪鉄道(株)（後に阪急電鉄と合併）では副社長格で経営に参画し古都京都のど真ん中の四条通りの地下へ私鉄を乗り入れさせるという難工事を成功させた。後に同志社や大阪医科大学等関西私学の理事を歴任し教育振興にも貢献した。

京都には一高はじめ全国の高校から秀才が集められた。松島氏以外にも尚徳翁は生涯の同期の友を京都で得ることになる。その一人が井上成美海軍大将の実兄で土木学会会長も勤めた井上秀二である。井上氏は京都帝国大学助教授を務めた後、全国主要都市を渡り歩き日本の水道整備に貢献した。水道協会の理事も歴任し、土木学会名著100選に選ばれる鉄筋コンクリート技術に関する著書も残している。尚徳翁は官営八幡製鐵所で鉄筋コンクリート技術でも最新鋭の土木技術に挑戦し、一方では北九州全域の水道普及事業を指導している。仕事の上で尚徳翁にとり井上氏はよき相談役であったと思われる。



井上秀二氏
(出典：土木学会HP)

熊本大学工学部の前身である熊本高等工業学校で土木工学科の教授を永らく勤め第四代校長となった遠藤金市も同期生である。尚徳翁は遠藤氏の教え子を多く官営八幡製鐵所に登用し、九州土木界をリードする優秀な人材へと育成してゆくことになる。

その他にも名古屋港の生みの親と呼ばれ中部経済の発展の礎を築いた奥田助七郎、酒田港の築港に尽力した野村年、横浜市の震災復興に情熱を燃やしながら若くして病死した坂田貞明、朝鮮軽鉄技師長となった水木常信、台湾鉄道建設に尽力した張令記、南満州鉄道(株)技師長から満州国道路局長をつとめた藤根壽吉等が尚徳翁と同じ京都帝大の花の第一期生である。

尚徳翁が官営製鐵所に任官するに至った経緯は明らかではない。同氏の卒業論文が小樽市の水道施設に関するものであったこと、製鐵所の初代土木技師大日方晴晞が水戸藩士であり、任官前に京都府技師を務めていたことが何かの縁になった可能性はある。大日方晴晞が京都府在任中に田辺朔郎の指揮の下で琵琶湖疎水や蹴上発電所の建設が行われており、少なくとも大日方氏は水道事業と技術について相当の関心を持ち、京都界隈の土木関係者に幅広い人脈を有していたことは想像に難くない。



沼田尚徳氏が入社したころの
官営八幡製鐵所
(出典：新日本製鐵(株)八幡製鐵所)

1 1. 尚徳翁 官営八幡製鐵所へ任官

尚徳翁が1900年（明治32年）7月に官営八幡製鐵所に入社した時、製鐵所はまさに建設の真っ最中であった。西日本中から人を集め、遠浅の洞海湾を浚渫し、ひなびた漁村の海岸を補強し、ドイツ人技術者向けに洋館作りの官舎を建て、当時最も高い建築物であった日本の天守閣を凌ぐ巨大な溶鉱炉や熱風炉を次々に立ち上げて行った。その様は当時の日本の他の地域では決して見られない壮観な風景であった。



青年技師時代の沼田尚徳氏
（沼田家 提供）

当時の門司新報によれば、明治34年の作業開始式で京都帝国大学理工科大学初代学長の中澤岩太教授の祝文が朗読され、製鐵所来賓として京都帝国大学教授一行が招かれたとある。製鐵所建設には当時の京都帝国大学の理工系教授陣がかなり関わっていたことを伺わせる記録である。

（製鐵所立上げに関する苦難の物語については他の機会に譲る。）

さて、尚徳翁は任官するや否や、急速に拡張されてゆく製鐵所の土木工事を矢継ぎ早に担当してゆくことになる。明治35年には技師に任ぜられ、明治44年修築科長となる。大正4年には米英国に出張している。

手がけた工事も繫船壁築造工事にはじまり、40万坪の洞岡埋築、八幡・戸畑電気運漕鉄道建設、そして河内ダムと河内・養福寺貯水池建設といずれも当時の日本で最大級の土木工事ばかりである。しかも尚徳翁は社会人人生の中で八幡の地から移動することなく、八幡の地で工場基礎、貯水池、埋立浚渫、港湾（護岸・岸壁）、軌道、道路、橋梁、トンネル、水道設備、建築工事、測量わたる実に多彩な分野で計画・設計・施工各局面の技術指導にあたった。尚徳翁は創生期の官営八幡製鐵所の発展と共に、日本をリードするオールラウンドな技術者に成長していったと言えよう。

1 2. 尚徳翁の最初の挫折

そんな飛ぶ鳥を落とす勢いの尚徳翁が大きな挫折を味わったことがある。

大正5年八幡構内の下大谷貯水池（跡地は現在、大谷球場となっている）の決壊事故である。大正5年3月に竣工したこの貯水池はわずか1ヶ月余り後の4月27日の豪雨で脆くも決壊し、製鐵所や付近の住宅地域に多大な被害を及ぼし住民1名の尊い命を奪う大惨事を引き起こした。この事故は欧米視察の出張から尚徳翁が帰国した祝いの宴の最中に起こった。夜中、事故現場に駆け付けた尚徳翁が目当たりにしたのは濁流に流され無残に崩れ去った堰堤の姿であった。尚徳翁自身が後の回顧談で述べているが、事故の原因は堰堤の強度不足にあった。貯水池の堰堤では、強度確保と漏水防止の為中心部に粘土を用いたコア堤を設け、周りを普通の土で囲うのが一般的な設計である。が、この堰堤では廃線となった九州鉄道の土手を流用され、赤土が混ぜられた粘土がコア堤に使用された。そのため所定の強度が確保出来なかったのである。尚徳翁は直接の設計施工責任者ではなかったが、修築科長という立場から管理責任の一端を担うこととなり3ヶ月間1/10を減給されるという厳しい懲戒処分を受けた。

尚徳翁にとっては減給よりも事故により貴い命が犠牲になったことが大きな心の痛手となったようである。その後、この事故の教訓から尚徳翁は、建設現場を自らの足で歩き自分の目で確認する現場第一主義の仕事のスタイルを育んでゆくことになる。

13. 尚徳翁の渾身の大事業 河内貯水池建設

数々の尚徳翁の功績の中で最も特筆すべきものはなんと言っても河内貯水池の建設である。河内貯水池の建設は1918年、鋼材年産65万トンを目標とした製鐵所第三次拡張工事での水源拡張対策の一環として、遠賀川水源の養福寺貯水池と共に決定された。背景には1914年に勃発した第一次世界大戦による鉄鋼需要の増大があった。



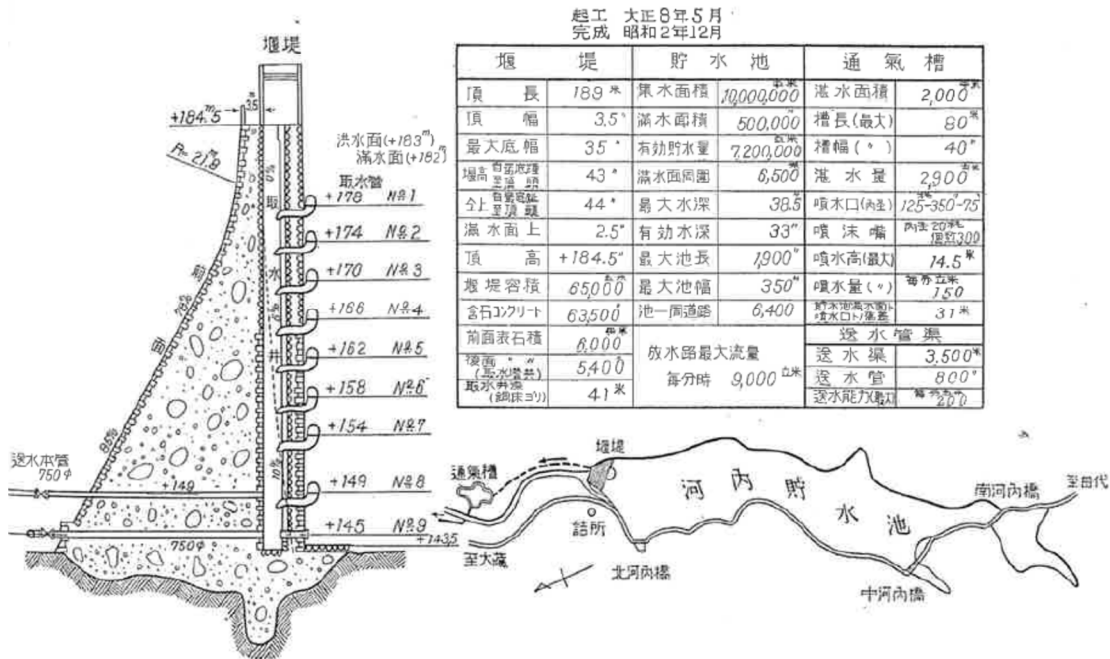
河内ダムと貯水池

そこで、河内に東洋最大級のダムを建設することとなり尚徳翁はこのダム建設の総責任者となった。ひとつの村をすべて水没させる大工事である。尚徳翁はここで、それまで培ってきた、「土木は悠久の記念碑である」というヨーロッパの土木哲学を具現化すべく英知と情熱を注ぎ込んでゆく。

建設現場の旧河内地区は八幡製鐵所の南10kmほど谷あいであり、人家が31戸ほどの水利に恵まれた平穏な農村であった。村はずれには草競馬場もあるのどかな村落は、豊かな自然と清流に恵まれた豊穰の地であった。

一方でこの地域は明治7年以降、河内教育と呼ばれた僻地独特の小規模マンツーマン教育の根ざした教育先進地域でもある。当時始まった都市部からの区域外児童の留学受入れは今も続いている。そういった豊かな自然と教育環境で育ったからであろう、村人たちは立

河内貯水池一覽表



河内貯水池とダムの概要図 (出典：八幡製鐵所50年史)

ち退きにも快く応じ、むしろダム建設に大いに協力したという。ダム建設では発破がけで採集された石を洗って利用したが、その石洗いの仕事も地域の村民が率先して手伝ったという記録もある。製鐵所と地域が一体になった工事を指揮した尚徳翁は村民たちや従事した労働者たちに大変慕われた。

上流側を掘り起こし砂利を採集し川の水で洗い落として堰堤へ運ぶ作業は繰り返した。最初、輸送にはトラックが用いられたが後半には八幡製鐵所から蒸気機関車が2台持込まれた。放水路にはオーバーフロー型が採用された。豪雨により水位が急速に上昇した場合はダム左岸に設置された放水溝に水が自動的に流れ込み、ダム下流の板櫃川へ流れ落ちるといったってシンプルな仕組みである。

尚徳翁はダムをとりまく建築物についても、取水塔から周回道路にかかる橋、管理事務所に至るまでその美観に徹底してこだわった。美しく後世に誇れる貯水池を実現させ、先祖代々の土地をこの大事業のために供出してくれた村民に少しでも恩返ししたいという尚徳翁の強い思いがあったにちがいない。美観に凝った建物や橋を見た会計監査院の担当官は「こんな余計なことをしているから金がかかるのだ。」と大層批判したそうだが、それでも尚徳翁は怯まなかった。

ダムの耐久性確保にも現地の転石活用を含め独特の英知を凝らしている。

当時コンクリートはまだ高価であったので、粗石を混ぜて使用した。外側からべったりした大壁に見える堰の中は銅板の伸縮継手で7つのセクションに仕切られ、コンクリートが気温で伸縮しても亀裂が発生しないように工夫されている。その一部には凹部を設け、漏水防止用の銅板が埋め込まれている。同時に他の空隙部には絶縁用塗料が充填されており、80年経た現在も継手からの漏水は認められていない。堤長は190mありその外壁の化粧材には上流の北河内谷一体の転石を採集し300mm×450mmの大きさに加工した自然石を採用した。堤のコンクリート表面に強固に密着するように規則正しく積み上げ、工事段階の型枠代わりに活用した。これらの石壁は完成後はダムの耐候性を高める保護壁の機能を果たし続けている。

表面に用いられた切石は12万個ともいわれ、この加工には、四国方面から来た多くの石工が従事したという。又、これらの過程で発生する細かな割石も、付帯建築物を貼り石仕上げにすることで一部を活用した。尚徳翁は貯水池周辺へ移住した村民の居住区を繋ぐ道路にも独創的な土木技術を注ぎ込み美観に優れた橋を多く建設した。



河内ダム上の取水塔



ダムの外壁

南河内橋はその一例で、レンティキュラートラス構造という欧米の都市にかかる鉄橋と同系統のデザインを採用した鉄骨橋である。優美な形状ながら乗用車と荷馬車が一台ずつ渡れる頑強な構造となっている。しかもすべて八幡製鐵所の自家鋼材を用い設計もすべて自社で行うことで土木建造物への鋼の新利用技術へ意欲的に挑戦した。優美な橋や西欧風の石積み作りの立派な建築物は会計監査院には贅沢に見えたかもしれないが、そこには、尚徳翁の建築美へのこだわり、当代一流の土木技師としての資材経済面を配慮した設計哲学、そしてなにより、先祖代々の土地とふるさとの美しい自然を供出し建設に協力を惜しまぬ村人へ恩返ししたいと思う技術者としての美学があった。

河内貯水池の周りには当時の世界水準から見ても先進的な技術を凝らした建造物が多々見られる。その一例が、河内ダム你真下にふんわりと宙に浮くように掛けられた超薄型の太鼓橋である。この橋は当時日本ではまだ珍しかった鉄筋コンクリート橋であるが、スパン/最小厚の比が140という世界にも例を見ない驚異的な極薄設計を採用している。鉄骨コンクリートを得意とする尚徳翁が手がけた数少ない鉄筋コンクリートの薄型建造物でもある。この橋は80年経た今も、地震の多いこの日本でひび一つ入ることなく完全な姿を留めている。

尚徳翁の得意な鉄骨コンクリート設計の代表作が北河内橋である。この橋は一見すると鉄筋コンクリートの橋のように見えるが、実は、やじろべい形状の梁構造の鉄骨を三つならべ、それをコンクリートで被覆した鉄橋である。鉄で強度を持たせコンクリートで座屈や錆を防止し、しかも、やじろべいの片側だけを片持ち梁として使用し、橋の真ん中でつなぎ合わせることで強固で長持ちする橋梁を実現している。“Balanced Cantilever Concrete Incased Steel Highway Bridge”と図面には記されている。鉄筋コンクリート技術が未熟であった時代に軍の重量車両も通せる強固な橋を山中に建設する上で尚徳翁が考案した独創的なデザインである。いずれも小さな橋で



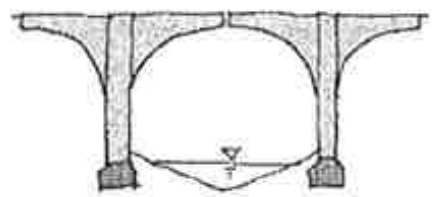
南河内橋
(欧米の鉄橋と同系統のデザイン)



河内ダムのすぐ真下に
宙に浮くようにかかる太鼓橋



鉄骨コンクリート橋の 北河内橋



カンチレバー構造の概念図

はあるが、その設計から最新技術を貪欲に取り入れながら、したたかに世界に挑戦した尚徳翁の技術者魂が見て取れる。

14. 尚徳翁のこだわり 死亡事故ゼロ

沼田は河内ダム建設の間 週末になると必ず決まって官舎の八幡東区の高見地区から山道を歩いて建設現場を見て回った。さらに、河内ダムの上流から標高400mの奥田峠を歩いて越え、当時並行して建設を進めていた養福寺貯水池の工事現場も一緒に見て回るのが常であったという。15km以上の山道を毎週欠かさず歩いて監督巡行していたことになる。

ちなみに尚徳翁の直属の部下で愛弟子である足立元二郎も京都帝国大学出身の土木技術者であったが、こちらは、自費で買ったオートバイ（当時はかなりめずらしかった）に乗って河内の現場に通っていた。

尚徳翁は白髪の慈顔に帽子を打ち振り、終始にこやかな表情で声を掛けて歩いて回った。工事現場で落ちているくぎや針金を見つけると、誰を責めるでもなく黙って拾い上げて片付けたという。そんな尚徳翁は現場スタッフのみならず、出稼ぎ労働者や手伝いに来た村人たちにも「製鐵所の乃木さん」と呼ばれ慕われたという。

尚徳翁のそんな心は現場の安全を支えた。建設にはのべ90万人の労働者が従事した。数百人規模の朝鮮からの出稼ぎ労働者や各地から集まった石工、鳶職人はなどなど常時千人以上が建設に従事していたと思われるが、軽いけがはあっても死亡災害は8年間1件もなかった。情熱溢れる沼田流現場第一主義に支えられ、720万立方メートルの水をたたえる河内ダムは昭和2年12月、ついに完成した。



河内ダム建設現場（新日本製鐵株八幡製鐵所提供）

ただ、このプロジェクトで尚徳翁が実現出来なかった思いもあった。その最たるものが、ダムから市内まで繋ぐ水路の暗渠（あんきょ）化であった。河内貯水池は堰堤の中央に取水塔を有しており、ダムの水はそこから4.3kmの水路を自然流下して市内の八幡製鐵所の配

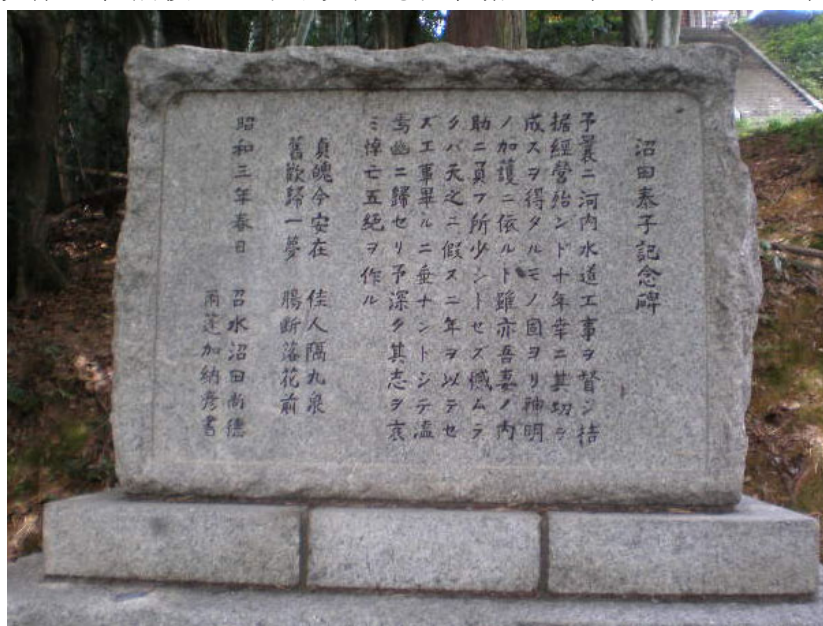
水場まで送られる。この水路は琵琶湖疎水と同様上面開放型の水路であった。山間を縫って引かれた水路は民家より高所に位置するため、豪雨に見舞われ決壊すれば下手の住宅地域に多大な被害が及ぶ危険があった。尚徳翁は京都で琵琶湖疎水を学生時代に目にしていたはずであり、そのすばらしさも欠陥もよく認識していたに違いない。又、尚徳翁は琵琶湖疎水の設計者で京都帝国大学の教授であった田辺朔郎の著書を愛蔵書としていた。確たる記録は残っていないが田辺朔郎と知遇を得てこの水路につき薫陶を受けていた可能性は大いにある。（ちなみに、田辺朔郎は尚徳翁卒業直後に京都帝国大学に赴任しており大学では師弟関係にはない。）もしその推測が正しければ尚徳翁は計画段階が暗渠水路にこだわったことは充分頷ける。

が、結局予算が間に合わず尚徳翁は断念せざるを得なかったという。翁はその悔しさを後の回顧談の中で語っている。果たして河内貯水池完成から21年後の昭和24年、この水路は集中豪雨で決壊する惨事を引き起こした。八幡製鐵所が、その後この水路を暗渠に改造したことは言うまでもない。下大谷貯水池決壊での苦い経験を繰り返したくない、安全を永遠に保つ土木建築を目指した尚徳翁にとり、果たせぬ想いであった。

15. 悲しみを乗り越えて

尚徳翁は現場では決して見せなかったであろうが、河内貯水池建設の間、数々の悲しみを心の底に押し潜めていた。実は、山の神はこの大事業の成功と引き換えに尚徳翁にかけがえのない家族を貢ぐよう強いていたのである。

事業開始と共にその不幸は始まった。河内ダム着工の前年には尚徳翁の次女が病死、その後、父の順匡（沼田順三郎）が死去、そして大正14年には、三人の娘が次々に病死した。大正15年に生まれた三男も6ヶ月で病死した。10年足らずで5人の子供と尊敬した父を失ったのである。そんな中、家族の不幸に堪え、尚徳翁を常に明るい笑顔で支えてくれたのは妻泰子夫人であった。だが、山の神は尚徳翁にとって最愛のその人をも奪い去ってしまった。河内ダムの完成と相前後して泰子夫人も猩紅熱で42歳の若さでこの世を去ってしまった。



尚徳翁が建てた妻泰子夫人の記念碑

たのである。高見の官舎では尚徳翁と泰子夫人との仲の良さは評判であった。そんな愛妻は、完成した河内ダムで流入水の貯水がはじまり、かつての村々が湖底に沈んでゆくのに合わせるかのように帰らぬ人となった。あたかも河内貯水池が沼田家の家族を人柱にして飲み込んでしまったかのような悲劇であった。ダムと貯水池の完成に湧く製鉄所や村々のお祭り騒ぎをよそに、尚徳翁は言いようのない悲しい寂しい日々を送っていたに違いない。

河内貯水池が完成し、建設村の撤収も完了した昭和3年秋のこと、尚徳翁は、河内貯水池そばに移設された白山宮の参道に隣接した土地を自費で買い求め、妻への感謝と哀悼の想いをこめて記念碑を建てた。村人たちの信仰を集めたこの神社の境内にたたずむ記念碑には、下記のような五言絶句の漢詩が刻まれている。

貞魄今安在 佳人隔九泉 舊歡帰一夢 腸断落花前

「愛する妻の魂はどこにあるのか。麗しきあの人と今は世を隔て、素晴らしき日々は夢に帰ってしまった。散りゆく桜の前にたたずむと断腸の思いである」

尚徳翁の名に雅号である「召水」の名が添えられている。「沼」という意味の雅号である。この碑と土地は沼田家の所有であるが、80年経た今も神社の氏子の方々が時々ボランティアで清掃に訪れているという。

16. 企業利益より社会貢献～尚徳翁の美学

実直でロマンティストの尚徳翁は、営利栄達にはあまり縁がなかった。これほどの大事業を成功させ、製鉄所と八幡市の発展の礎を築いた男である。当時少将や中央省庁の局長相当の高等官二等に処遇され（勇退直前には高等官一等にまで登りつめた）、勲三等瑞宝章まで授与された男である。製鉄所内では土木部長でありながら製鉄所長官や技監に次ぐ処遇を受けていた男である。にも関わらず、昭和5年7月、55才の誕生日を待たずして静かに勇退した。

尚徳翁はその後も八幡、戸畑、若松市の囑託として三市の上水道整備を指導し多大なる実績を残した。日本最大級の軍需工場であった小倉陸軍造兵廠の土木関連業務も手がけられたようである。が、昭和9年1月、忽然として全ての職を辞し田舎に隠棲されてしまった。純粋な想いで日本を憂い幕末を駆け抜け命を散らしていった水戸藩士の実直さと不器用さをそのまま引き継いだ水戸魂に溢れた男だった。

尚徳翁の人となりを見ることが出来るエピソードがある。八幡製鉄所は河内貯水池の計画段階から八幡市が上水道を敷設した場合水源として分水することを約束していた。そのいきさつから、尚徳翁は八幡市の上水道整備事業にも指導者として参画していた。八幡市が渇水に見舞われた時、尚徳翁は優先して河内の水を八幡市に分水したことがある。製鉄所が水不足で水源拡張を進めている時に約束以上に市に分水したのである。尚徳翁は製鉄所上層部から叱られたが決して尚徳翁はひるまなかったという。社会公共性を企業利益より重んずる尚徳翁の哲学が感じ取られる話である。

17. 文学と尚徳翁

幼いころからの素養であろうか、尚徳翁は漢詩に対し造詣が深く在職時代にも地域の著名な文人たちと交遊していた。その中には到津遊園園長で詩人であった阿南哲朗もいたことは想像に難くない。阿南哲朗は野口雨情の門下生である。昭和8年、野口雨情は八幡を訪れ地元の帆柱山に登り童謡を残しているが、阿南はその案内人も務めている。帆柱山系の峰々の山頂からは、北側に尚徳翁が会社人生のすべてを注いで切り拓いてきた製鐵工業地帯の雄姿を、そして、南側には美しき山懐の静寂の中にたたず



帆柱山系から河内貯水池を望む

む河内ダムと貯水池を望むことが出来る。詩人野口雨情は、この尚徳翁の渾身の傑作である箱庭のような風景を眺めながら「帆柱山の歌」という心優しい童謡を作った。

当時、尚徳翁と野口雨情が、お互いの先代たちが志を同じくして戦ったという縁を知っていたかどうかは定かではない。が、多くの苦難を乗り越え、両家の末裔の尚徳翁と雨情が残した近代産業都市八幡の美しい風景と心優しき詩のハーモニーは、その姿と心を北九州の地にとどめ、両家の先代の志を感じさせるように、今も明るい響きを伝え続けている。

18. 引き継がれる美学と想い

尚徳翁の哲学は製鐵所の土木の後輩に脈々と引き継がれていった。尚徳翁の後任として八幡製鐵所の土木事業を統括した足立元二郎や太平洋戦争中に八幡製鐵所の土木部長を勤めた守田道隆も尚徳翁の薫陶を受けた面々である。二人とも京都帝国大学土木工学の出身で沼田哲学の継承者であった。守田氏は昭和初頭八幡市に勤めている時、製鐵の鉦滓セメントを用いた不燃建築の実用化を推進し八幡の大蔵小学校で日本で初めて成功させた。この技術で日本の小学校の不燃化が一気に進み、戦中戦後の空襲や火災の多い時期に多くの児童が校舎の火災に見舞われることなく生きながらえることが出来た。守田氏は戦後も八幡市長として復興と発展に尽力した。

沼田家の人々は幕末から明治、大正、昭和と、三代にわたり日本の将来を夢見て命を燃やし、たくさんの血と涙を流してきた。傍目にはそれらは犠牲となることばかりの割に合わない人生のように見えたかもしれない。しかし、彼らの想いは幾多の試練を乗り越え、確実に尚徳翁に手渡された。そして尚徳翁も、自身大きな心の痛みに堪えながらついにその想いを土木建造物の形で花開かせた。あれから90年、尚徳翁の名前を知る人もほとんどいなくなった。しかし、河内ダムと貯水池は今も堅牢で優美な姿を留め、時代を超えて北九州市民の生活を、そして貯水池に憩う人々の心を潤し続けている。一世紀に近い時の流れの中で自然の風景に溶け込んだ河内貯水池とその壮麗な建造物は今も新しいドラマの舞台を人々に提供し続けているのである。

河内ダムの堰堤を見下ろす小高い場所にヨーロッパの古城を模したといわれる管理事務

所が建っている。その出入り口上部に尚徳翁の「遠想」の言葉を彫り込んだ石の掲額が残されている。ここから河内ダムを静かに見下ろしながら、尚徳翁は遠く未来に想いを馳せたに違いない。

その未来の姿はどのようなものであったのであろうか。それは百年の時を経て、なお人々を潤し続ける河内ダムの姿、そして彼の残した礎の上でいつまでも成長し続ける日本の未来だったのではないだろうか。

小職は製鉄業に就職したものとして、尚徳翁のようなすばらしい技術者が先輩におられたことを誇りに思う。また、尚徳翁の残した土木基盤の上で今日もこうして事業を続けさせていただいていることに感謝したい。

そして、名声や地位に溺れることなく技術者の美学を守りとおした尚徳翁の生き方に少しでも近づき、尚徳翁が想いを馳せた日本の未来の絵図に、新たなもう一筆を加えたいと思うこの頃である。



「遠想」の石の掲額

(後記)

寄稿に当たっては、収集した情報に基づいた誠実な記述を心がけましたが、中には小職が誤認した部分もあろうかと存じます。お気づきの点、ご感想等ございましたら下記までお寄せ下さい。皆様の忌憚のないご意見をお待ちしております。

千々木 亨 mail : toruchichiki@gmail.com

(引用文献)

天狗党関係殉難死節履歴 常陸太田市史編さん委員会

DL新八 水戸天狗党の足跡を追う ホームページ (2010年)

梅村速水の足跡をたずねて、梅村速水顕彰会

夜明け前、島崎藤村

水府系纂目録 常陸平氏系 太田氏

デジタル版 日本人名大辞典+Plus、講談社

国立国会図書館 近代デジタルライブラリー

旧制第一高等学校 卒業生名簿 (大正7年版 <明星大学 情報学部 知能情報研究室 所蔵>)

京都帝国大学 卒業生名簿

ヨミダス歴史館 読売新聞記事 (明治26年5月23日、明治26年6月4日)

土木学会誌 27巻1941年6月号

土木学会ホームページ

毎日新聞 余録 (2009年3月25日)

つちき会40周年記念小誌 遠想 - 沼田尚徳の実績と情念

河内水源地 ~ 技術者達の想いを訪ねて ~ つちき会

八幡製鐵所50年史

門司新報 (明治34年11月18日、明治34年11月19日版)